

R & V

1992年
春号 4月～6月
第5号

オールド・ボーイの独り言

ここ数年、山へは御無沙汰しており全然登っていない。かつての燃ゆるような情熱はどこへいってしまったのだろうか！あの風雪の岩壁・紅葉の渓谷・吹雪の稜線と精力的に行動し、山の極道を自認していた頃が遠い昔のように思われてくる。

振り返ってみると、ほんの短い人生の中でも、幾つかの転機が訪れ、そして通り過ぎていったような気がするが、いとも簡単に山への情熱が萎んでしまい、心の底には山への愛着だけが残っている自分の気持に整理がつかず、戸惑いを感じている昨今である。新聞等に、夏山情報・遭難記事等が掲載されると必ず目を通し、書店の店頭では、『山と渓谷』・『岳人』・『岩と雪』に手を伸ばして立読みし、遠き山々に思いをはせる事もしばしばである。また、職場で毎年恒例の身上書記入時に、趣味の欄へ、後ろめたい気持ちで『登山』と記入して、山に対する愛着心をかすかに感じて、ほっとして自己満足している自分に気付く。

山へのカムバックを躊躇している原因は何かと、自問自答してみると、第1の原因是、体力の衰えだと思う。日々の誘惑に負け、デップリと腹が出てしまった体重？kgの体ではたして山が登れるのだろうかと不安になってしまう。さらに第2の原因は、日々のしがらみを断ち切れない自分自身の気持ちの問題だと思う。守るべき家庭・仕事・社会的地位・小遣いの少なさ（？）等々。

しかし冷静に考えてみると、自分自身の心の支えは、山で学んだ事が多い事に気付く。日常生活の中、仕事の中でも苦しい時には、冬山での厳しいビバークの辛さと比較して自分を励まし、心の動搖を抑え切れない時には、岩壁登攀で培った平常心を思い出し等。自分にとって山は恩師であり、人生の道場であったような気がする。

昨今の新聞・雑誌等では、中高年の登山者が増加しているとの記事を目にすることが

多いが、そのような記事の中で、若年時に登山に親しみ一時中断後、中高年になって再び登山を始める人が多数いると書かれてあった事が、強く印象に残っている。

実は、先日職場の先輩から、来夏、富士山に登りたいので、その前段階として今秋ハイキングに連れて行ってくれないかとの要請があった。自分の体力に自信がないので、現在迷っているが、山へカムバックの第1歩として紅葉の山へ日帰り登山でもと考えている。20数年前、奥多摩の山へ第一歩を踏み出した時の、あの胸の高鳴り、あの感動を再び求めて、紅葉の美しい山を選定中である。

希望を・夢を語ると、かつてそうであったように、低山ハイキングから日本アルプスの高山へ、さらに一ノ倉沢の岩壁（勿論易しいルート）へと、かつての思い出を遡りながら攀れる日が来る事を、胸の奥深く夢見ているオールド・ボーイです。

(ACC-J茨城OB 木村一)



?年前 現役時代の木村御大
越後駒ヶ岳佐梨川金山沢奥壁登攀
郡界尾根にて

目 次

(吉嶋真樹士 やまと ひろし 氏)

吉嶋会長

1992年 春号 4月～6月 第5号 ACC-J茨城

オールド・ボーイの独り言	1
集会報告	4
山行報告	5
戸隠山	6
後立山（爺ヶ岳～針ノ木峠）縦走	9
1992 春合宿 奥穂高岳南稜	12
真陸の春合宿（前穂）	15
例会山行（丹沢早戸川集中）	
一川上君お別れ山行一	
瀬戸の沢	18
早戸川太礼の沢	19
円山木沢で有終の美を飾ろうとして	21
早戸川流域、本間沢での一日	23
鳥屋鐘沢	25
谷川岳一ノ倉沢南稜	28
憧れの中央カンテ	30
一ノ倉沢 中央稜	32
初めての谷川岳、一の倉沢・南稜	34
編集後記	39

集会報告

(於、スカイラーク土浦真鍋店)

大 目

4月 1日

出席者 本団、菊地、高田、原田、栗原、高木、川上、笹沢、
長久保、庄司

4月 15日

出席者 本団、菊地、高田、佐藤

4月 22日

出席者 本団、所、鯉河、高田、佐藤、村上

5月 13日

出席者 本団、所、鯉河、高田、高木、鈴木、川上、佐藤、笹沢、
村上、長久保、庄司

5月 27日

出席者 本団、高田、原田、川上

6月 10日

出席者 本団、菊地、高田、原田、佐藤、村上

6月 24日

出席者 本団、木村、菊地、鯉河、原田、佐藤、村上、笹沢、中居

山行報告

4月29日	戸隠山	L本図、原田
4月25～28日	後立山（爺ヶ岳一針ノ木峠）	L名雪、仲川、高田
5月2日～5日	穂高春合宿 奥穂高岳南稜、前穂高岳	L高田、本図、所、佐藤、 村上、庄司
5月17日	例会山行（丹沢早戸川集中） 瀬戸の沢 太礼の沢 円山木沢 本間沢 鳥屋鐘沢	L佐藤、笹沢 L生井、高木 L川上、中居 L原田、村上 L高田、本図
5月31日	県岳連岩登り講習会	本図
6月6日	日立御岩山（R C T）	L高田、中居、庄司
6月7日	谷川岳、一ノ倉沢南稜	L高田、原田、中居
6月13～14日	谷川岳、一ノ倉沢 中央カンテ、中央稜	L高田、原田、中居
6月14日	谷川岳、一ノ倉沢南稜	L本図、鯉河、大月

戸隠山

92. 4. 29

パーティ L 本団一統、原田真由美

吉野山

ゴールデンウィーク初日の日曜日、夜行日帰りのできる、残雪があつて、ちょっとスリルのある山に行こうという事で戸隠山の山行計画が組まれた。以前から戸隠山行きの話はちょくちょく出されたが、どういう理由かいつもボツっていたので楽しみである。戸隠山は凝灰質集塊岩からなる峻険な山で、昔は修験道の山として栄えた信仰の山であるらしい。現在、奥社には天手力男命がまつられている。

深夜、奥社入口の駐車場で仮眠をとり、明るくなった頃私達は目覚めた。明け方まで雨が降っていたらしく、路面に水たまりができているが天気はまずまずである。見上げると、朝日を受けて一枚の壁のような戸隠山が威風堂々とした姿で目の前に立っている。残雪は少ないようである。本団さんはズック靴にピッケル姿、私はブランパー



八方睨にて、原田



戸隠山稜線を行く（前方は高妻山）

ツにピッケルを持参して出発した。

奥社入口からまっすぐ延びる参道を歩いていく。途中の隨神門からは立派な杉並木が始まり、入口から約30分で奥社に着く。ここで一休みし、社務所のわきから登山道に入る。最初からきつい登りが始まるが、50分くらいで百間長屋に続く五十間長屋に出た。右手の岩壁が覆いかぶさってくるようである。しかしここまで来て、私は疲労感強度、倦怠感著明、プラブーツが重い。急登が続くためサッサと高度はかせげるが、同様に疲労感も増していく。資料ではまだまだ急登が続くようだ。”もう戻りたいよー”と喉の奥までこみ上げるが、負けん気な性格がついついじやまをして、その言葉を飲み込んでしまう。

ゼーゼー息を切らせながらも、右の岩壁にある西窟を見て、5mくらいの鎖場を登ると天狗ノ露地に出た。ここからは、西岳を間近に見ることができる。天狗ノ露地から数カ所の鎖場を次々とよじ登り、胸突岩を登れば蟻ノ戸渡りである。両側が切れ込んでいて、幅が40cmくらいしかない。雪のため滑り落ちそうである。プラブーツで足元をかため慎重に渡るが、最後の2mくらいは4つ足で渡った。剣ノ刃渡りを通

り、岩を少しづつ登れば八方睨に立つことができる。八方睨は文字どおり展望のよい狭いピークで、立ったとたんについつい疲労感を忘れる。昔はここに避難小屋があつたそうだが、現在は崩壊し、跡が残っているだけである。ここからの縦走路は西側を巻いたり、断崖のふちを伝ったりしながら小さなピークを登り降りし、最後に屏風岩の岩壁を避けて西側を巻ながら登りきると、足元に一不動避難小屋が見えた。高低差約130m。だいぶ下である。しかし疲労感よりも空腹感の方が強いため、苦手な急な下りも自然と足が早まる。避難小屋は軽石ブロック造り、鉄板葺きカマボコ屋根の小さな小屋である。ここでゆっくり休憩を取り、昼食をとった。私もげんきなもので、あとは下るだけなので元気一杯である。約1時間ほど下った所で戸隠牧場の草原に出た。ここはシラカバの木立が点在する広々とした草原で気持ちがよい。ワラビとかゼンマイとか忘れたが、たくさんあり、本図さんが一生懸命取りあさっていた。牧場の中をしばらく行くとキャンプ場に出て到着となる。ビールで乾杯し、“お疲れさまでしたー！”

(原田 記)



戸隠牧場

後立山（爺ヶ岳～針ノ木峠）縦走

92. 4. 25～28

パーティ L 名雪博二 (ACC-J東京)、仲川敏幸 (ACC-J東京)、高田暢年

4/24 新宿駅で名雪さん、仲川さんと落ち合う。私がホームに着いた時既に、二人はザックの上に座り酒を飲んでいた。私も早速キヨスクで酒を買い、列車がホームに入ってくるまで、三人で一杯やることにする。

最近山に行く人は少ないらしく、ホームに山の格好をした人はチラホラしかいなく、実際列車に乗り込んでも一人1ボックス占領となった。

4/25 信濃大町駅 5:15 着、まずは駅のコインロッカーに合宿後半用の山道具を預けタクシーで爺ヶ岳の登山口へと向かう。タクシーの運転手の話しによると2～3日前に雪が降ったらしい。稜線上は冬山のように真白である。天気はいいのだが風が相当強いらしく雪煙が舞っている。

6:30 出発、柏原新道の急な登りをひたすら歩く。下の方の樹林帯を抜けると種池山荘が小さく見える。まだ稜線は遠い。2～3日前の新雪のせいで所々足が潜る。時々強風が吹き、息が出来なくなる。ヘトヘトになりながらも 12:00 種池山荘着。小屋はまだ半分位雪に埋まっており営業していない。風が強く小屋の回りを探してもテントを張れそうな場所はない。しかたなく爺ヶ岳を越え冷池山荘に行くことにする。この時は3人共、冷池山荘は営業しているものだと信じて疑わなかった。思い起こせば3年前、春合宿の時、季節外れの大雪が降り冷池山荘に1日閉じ込められた思い出がある。3人でストーブにあたりながらビールでも飲もうと話しながら、それだけを心の支えに、強風の中やっとの思いで冷池山荘に着いたが、我々の期待をよそに小屋はまだ営業してなかつた。（15:30 着）3人で悔し涙を流しながら、小屋の脇にテントを張り早速酒盛りが始まった。焼酎が体の中にしみこむように入っていく。1日の内で一番幸せな時である。

4/26 朝ゆっくり目を覚ます。誰もシュラフから出ようとしない。天気はいいみたいである。そのうちヘリの爆音が近づいてきた。どうやら小屋開けの準備の人達らしい。邪魔になるので、急いで起きだし出発の準備をする。8:00 出発。ヘリで荷上げしてきた荷物の中のビールを恨めしそうに見ながら、昨日きた道を戻る。風は今日も強い。棒小屋乗越から岩小屋沢岳を越え、新越乗越に 12:38 着。ここにも

小屋があるが殆ど雪に埋まっており、まだ営業していない。ここで風の当たらないテント場に最適な場所を見つけ、1本とり3人で今後の相談をする。テントを張るにはまだ時間が早い。しかし針ノ木峰にテントを張ってみたい。それには今日ここにテントを張ったほうが、明日調度いい時間に針ノ木峰に着く計算になる、などと考えているうちに、酒盛りが始まった。

4/27 6:30発。鳴沢岳から赤沢岳、スバリ岳と今日はピークハントが続く。この辺りは右下に黒部湖が見えなかなか絶景である。13:40、この山行で私が一番楽しみにしていた（学生時代から登ってみたかった）針ノ木峰に着いた。ここでしばらく記念写真などを撮りながら景色を楽しんだ。

ここより今日のテント場である針ノ木峰へと下る。なかなか急な下りであり、少し緊張する。我々が下ろうとしていると、針ノ木峰よりスキーをショットした単独の男性が登ってきた。彼は針ノ木のピークよりあつという間に針ノ木雪渓をスキーで滑っていった。

針ノ木峰15:00着。ここ的小屋もまだ営業しておらず、ビールにありつけなかった。ここで3人が持ち上げた焼酎は底をついてしまった。検討した結果、酒も切れたことだし、明日は下り、大町の名湯”薬師の湯”に入りビールを飲もうという事になり、下山決定となつた。

4/28 針ノ木雪渓をひたすら下る。所々腰まで雪に潜りながらも、3人の頭の中は温泉



針ノ木雪渓にて

とビールしかなく、扇沢を目指す。

この日は平日の為か薬師の湯はガラガラであった。温泉につかりサッパリしたところで、いつもの（？）そば屋で無事下山祝いをする。ビールで乾杯し冷酒、日本酒ひや、こいこく、日本酒ひや、こいこく、日本酒ひや……途中記憶が途切れている。なんとなくソバを食った覚えもある。

ハタと気がつくと信濃大町駅の待合室の椅子のうえで寝ていた。「あれ、いつのまに」頭が痛い。時計を見ると夕方の5時であった。名雪さんと仲川さんの姿はない。先に帰ってしまったらしい。（後で聞くと2人も記憶が定かでないらしい）

私は一人で松本まで行き、この日は松本駅前のサウナに泊まり、翌日春合宿後半の岳沢に入る為、上高地へと向かった。

今振り返っても、天氣にもパーティにも恵まれ、大変楽しい山行であった。

名雪さん、仲川さん、どうもお世話になりました。又どこかの山で名雪さんの泡盛を飲ませてください。あ、あと高級塩辛も忘れずに。

（高田 記）



無事下山おめでとう どこかのおばちゃんと共に
左（名雪） 右（高田）

1992 春合宿 奥穂高岳南稜

92. 5. 2~5. 3

パーティ L 高田暢年、佐藤文則

今年の春合宿の入山も、高田さんと一緒に。既に針ノ木を縦走してきた高田さんと、上高地で待ち合わせをした。真っ黒に日焼けして、アルコールにもやけている高田さんは、上高地のバス停で寝ていて、観光客の人に気持ち悪がられたらしい。ぼくが、一緒にいたらそんなことはなかつただろうに…。

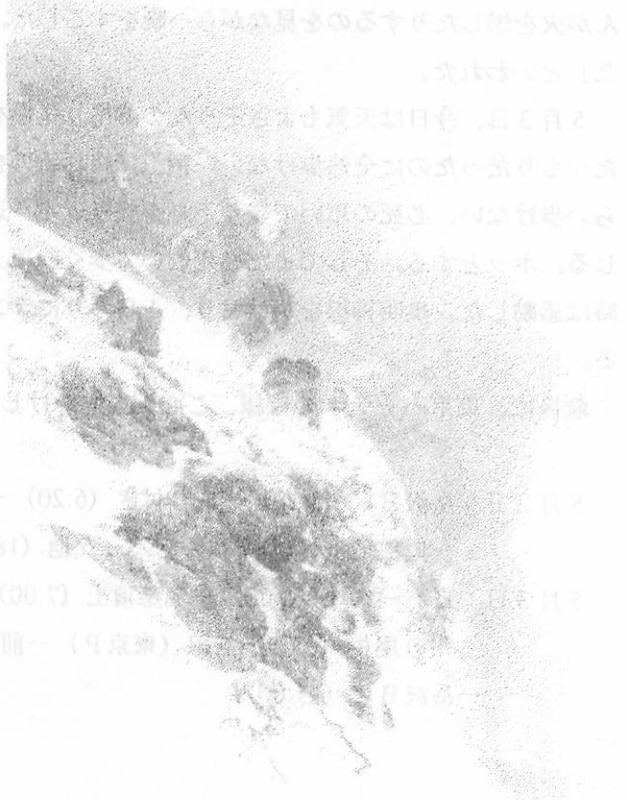
そんな訳で、4月30日朝、上高地で僕たちは落ち合って、岳沢へと向かった。テント場について、整地をしたら、降っていた雨があられに変わったのでそのまま停滞。翌5月1日は、朝から雨とガスのため停滞。10時30分頃から偵察にでた。お昼頃からはよく晴れて、小屋の前でひなたぼっこをした。小屋の人もここ2、3日のうちに上がって来たらしく常連客らしい人達と雪かきなんかをしていた。この日は、霞沢岳、六百山、焼岳がよく見えた。



南稜を前に（高田） キジを…ではなかつた

さて、入山3日目の5月2日、快晴。昨日の天気が続いている。5時20分にテントを出る。昨日の偵察と先行パーティーのおかげでトレールは、しっかりとしている。取り付いてしばらく行くと、やや急な斜面となりダブルアックスで快適に登る。佐藤も最初は恐々、すぐに慣れて体力勝負のフルパワーで先に立つ。雪が固くなり、怖くなつたところでザイルをだしてもらう。ザイルをだして2P目のところで単独の人になかれる。岩稜に雪がついたような稜線をいく。「これがトリコニーかなあ」「やけに早いですねえ」「こんなもんだべ。こりやあきょうは3時には小屋でビールだな」などと言いながらいくと、どへんとでましたトリコニー。ありやしまつた、ここは奥穂、スケールがでかい。高田さんの勘も狂つたらしい。下から見えてると先行の四人が下りてくる。トリコニーのしたで話をきくとこの先ナイフエッジがいやらしくて戻ってきたそうだ。たしかにすでに天気も崩れはじめ、状態がいいわけではなかつたが、僕たちはさきへ行く。

トリコニー3Pは、やや緊張したもののが難無くすぎて、先行が引き返したというナイフエッジもとくになにもなくすぎる。さてあとはただひたすら稜線を目指して登るだけ、なんだけれども前が見えない。この上部の雪壁の辺から地吹雪となり、ゴーグルをしていない佐藤の眼鏡には雪がついて前が見えないのである。高田さんがあせっているのがわかるが、前が見えないのはもっと怖いので雪を拭きながらのぼる。吊り尾根がわからず、奥穂の頂上を目指すことにする。とにかく上へ上へ、である。16時35分頂上。安全のため小屋へ避難することにして、小屋へと急ぐ。



トリコニーの登攀

が、しかし小屋すらわからない。どうやら道に迷ったらしい。急に不安になる。岩陰でピバークする。初めてのことである。死ぬのだろうか。いや、そんなことはあるまい。『孤高の人』を、思い出す。しっかり食べて暖かくして寝れば平気なはずだ。岩棚の上にピッケルとバイルを打ち込み、支点とし、ザイルを結び体を固定する。ザックを尻にひき、ツエルトをかぶる。風を避けるだけでかなりあたたかい。さて、食べなくては。行動食をむさぼり食う。朝いらいだから、いっぱい食べる。高田さんが沸かしてくれた『HOT練乳』を飲む。うまい。温度といい、濃度といい最高である。あとは、寝れるか、である。

佐藤はシュラフカバーに入る。高田さんはセーターを着込んでいる。やっぱり寒い。でもとにかくねる。寝たら寝れるもので、佐藤はしっかりと寝た。まあ、やっぱりウトウトで、時々目を覚まし、足の指を曲げたり伸ばしたりしたり、うつろに高田さんが火を燃したりするのを見ながら一晩をすごした。起きたら案の定「スースー寝てた」といわれた。

5月3日、今日は天気もよさそうなので吊り尾根をいくことにする。体力は回復したつもりだったのに全然歩けない。頂上で晴れるのを待って歩き始める。情けないくらい歩けない。必死の思いで登り下りを繰り返す。途中で、名雪さんたちと無線が通じる。ホッとする。そしてまた必死こいて歩く。頂上を巻いて一般の登山者が見えた時は感動した。奥明神沢をかけおり、1日ぶりにテントにはいる。ああ僕は生きている。

最後に、東京パーティの皆様、ご心配をおかけしてすみませんでした。

5月2日 岳沢B C (5:20) - 取り付き (6:20) - トリコニー (11:00)

- 奥穂頂上 (16:35) - ピバーク地 (18:00)

5月3日 ピバーク地 (6:00) - 奥穂頂上 (7:00) -

吊り尾根 (8:00) 無線 (東京P) - 前穂下 (10:00) 無線 (本団P)

- 岳沢B C (11:00)

(佐藤 記)

真陸の春合宿（前穂）

92.5.3～5.5

パーティ L 高田暢年、本団一統、所 繁、佐藤文則、村上晴美、庄司真陸

はじめまして、辺境の地、不毛の砂漠、鹿島から参加の庄司です。山には全く関係ありませんが海水浴のときはぜひ立ち寄って下さい。それでは、現時点において初参加にして唯一の山行であるGWの前穂について報告します。

下館前日夜集合。本団さんと所さんが前座席、村上さんと私が後ろのベッドで寝つ転がり出発。なんだか非常に申し訳ない気分だなあ、と思いながらもしっかりと眠って沢渡到着。今回の山行が人に頼りっきりであることを象徴するような始まりである。上高地から岳沢まではだらだら登り。思ったより雪がないなと感じたのは最初だけ、ベースキャンプに着くころにはきちんと雪山になった。そこで前日ピバーク後下山したばかりの高田さん佐藤さんと再会、2人ともマックロである。そして荷の整理をすると、所さんのザックからビールがザクザクと8本も出てきたのには全員恐れ入った。

午後は本団さんの指導のもと、村上さんと滑落停止訓練を受けた。後転からの停止は自分の顔にピッケルを打ち込みそうで嫌だったが、やらずに済んだのでホッとした。本当にいざという時役に立つかな、でも何もしないのよりはマシなんだろうな、と考えながら1時間あまり。終了したときは結構疲れていた。

夕方は本家だか分家なのか分からぬ東京ACC-Jと合同飲み会になった。その場のイニシアチブを握ってしまった、と言うよりも、馬上天下を取ってしまった、と表現する方がしっくりいく東京の人達の出現である。話しの内容が豊富な人達だが、何も知らない私はそのスゴさよりも、ただの酔っ払いのオジさんにも見える。しかし、本当はきっとたいへんなベテランなのだろう。酒はあっという間に消えていき、そして過去の充実した日々を思い出したのか、この日最もハイになったのが意外にも本団さんであった。

次の日4時起床。前日4時起きだとは聞いていたが本当にこんなに早いとは思わなかつた。そしてそれから皆んなのシュラフ、マットをたたみ茶をわかつまでの動作が機敏なこと、低血圧の私には目の前の佐藤さんの動きに追従するのがやっとだ。やは

りバリバリの人たちは朝からいきなりテンションが高い！しかし雪は静かに降り続いている。結局前穂への出発は7時過ぎであった、といつても少し小降りになったとはいえ悪天候には変わりがない。（春山にしては）周囲で次々にパーティが出発する状況が、ではオレらも行けるここまで行ってみようかね、という雰囲気にさせたのだ。私もなんとか登りたくて、まさかここまで来て中止にならないだろうな、と不安だったのでホッとした。しかしその気合充分とは裏腹に、用心の為ハーネスをつけようとするが思うように上手くいかない。見るに見かねた佐藤さんに手とり足とり教えてもらう。できの悪い幼稚園児が親に洋服を着させてもらうようでかなり恥ずかしい。一方、村上さんは完全武装で、その姿は小学生低学年の頃買つてもらった超合金ロボットを彷彿させた。そして本図さん、所さん、高田さんという超強力メンバーに囲まれ総勢5名出発。

しばらく過ぎて傾斜は徐々に角度を増し、吹き付ける雪も強くなってくる。だが先頭の本図さんの確実な足どりは頼もしい限りだ。私はただその後ろをついていく。先頭をその後交替、いよいよ出番だ。前パーティのラッセルが残ってはいるがトップを行くのはやはり気分がいいぞ、と思ったのは最初の10分だけですぐに疲れた。しかし今まで無雪期しか登ったことがないからか、ついつい夏山ペースになってしまふ。そのうち村上さんがリタイヤ、本図さんもつきそいで降りていく。そしてさらに登れば登るほど条件は悪くなっている、上から引き返すパーティといくつか擦れ違うようになる。残った3人も、今日はダメかな、という気持ちにされていく。途中で一息しても、バレーボール大の雪が間段なく落ちてきて全く油断ならない。またいそいそと登り出す。何度も引き返そうかと話すが、もうちょっとだけと進んでみる。そして途中で出会った人々の「あと1時間で山頂」「30分で着くよ！」という景気のいい大ウソに何度も騙されながらも、結局正直に登り��けてしまう。私にはもうどこにいるのか現在地がさっぱり分からぬのだが、所さん、高田さんが「もうちょっと右」「次左だ！」と方向修正をかけてくれる。そしてただ登るだけならなんとかなるのだが、進行方向を変えるときや斜めに進む時など、大分オタオタして見苦しい姿をさらしてしまう。そして頂上直下、もう足を使い果たしてしまい精も根もつき果てながらも、姿勢などおかまいなしで四つんばいになりながら登っていく。しかし、息絶え絶えの私を尻目にその横を平然な顔をして所さん、高田さんが進む。どうしてこの2人はこんなに力が残っているのか？とくに高田さんはすごい。前日ピバークしてきたばかりだというのに、一体何なんだこの人は？！

かくして登頂。積雪期の三千メートル峰上に立ったのは史上初だ！しかし風強く、おろしたザックが飛ばないようにかがんで押さえつけなければならないような状態が続き、写真を撮るのさえままならない。そんな悪条件下だが満足感でいっぱいだ。登ってよかったと思う。その後記念撮影をしてると、この吹雪の中を明神岳の方から登攀してきた人が出現したのにはたまげた。全く違う世界の人間を見る思いで、私にはただひたすら尊敬することしかできない。一方、私は下山を考えると完全にビビってしまい、自分でも顔が緊張感で硬直しているのがわかる程だ。

所さんにザイルをつないでもらい、ブザマな格好でおりてていく。ペースやザイル間の距離を考えないでいいから、という所さんのお言葉により、本当に何も考えずに降りる。余裕が全くなかったが、所さんのおかげで無事だった。所さんは超タイヘンだったことだろう。所さんとは偶然同じ会社だが、なぜか私の職場に悪意、敵意を感じているようで恐怖していたが、やはりいい人だった。その後もシリセードが上手くできなかつたり、氷のつぶに顔面を直撃され痛い思いをしたりとドタバタしたが、どうにかテントに着くことができた。今回の山行は全て周りの完璧なるアシストのおかげでの登頂だった。次からはもう少し迷惑度を減らし、少しでも戦力になれるようにしたい。以上。

（庄司 記）



カッパ橋にて（本図、所、村上、佐藤、庄司）

例会山行（丹沢早戸川集中） —川上君お別れ山行—

92. 5. 17

Aパーティ	L	佐藤文則	笹沢ひろみ
Bパーティ	L	生井一男	高木均
Cパーティ	L	川上浩史	中居康展
Dパーティ	L	原田真由美	村上晴美
Eパーティ	L	高田暢年	本団一統

瀬戸の沢

Aパーティ L 佐藤文則、笹沢ひろみ

今回の原稿も、しびれをきらした変哲長より、病院に催促のTel がかかるてきてしまった。「今度の集会こられますか？ 必ずもってきてね」 どうも苦手だ。もう3ヶ月以上まえのことよくおぼえていない。最初にとりあえずいいわけをならべておこう、と。

それでは本題の瀬戸ノ沢。最初は一つ手前の太礼の沢へ行く、生井さん、高木さんと4人で進み、取りつきを確認して別れる。渓流シューズにはきかえ、いよいよ出発。沢に入るとすぐ滝があらわれ、つぎつぎ7m～10mぐらいの滝が5～6コ連続してあった。佐藤君はほとんど直登した。私もザイルを出してもらって少しは直登した。その中で苦しかったのは、水しぶきがかかって息が吸えなかったこと。顔を横にむけても苦しかった。とりあえず登らなくっちゃとあせりながら、こけながらどうにか登れた。ああたすかった！

それからまた滝があらわれ、自分で登れそうになかったので高巻きをして、滝の上について下を見おろすと、佐藤君が直登してきたが、どうも先に進めない様子である。そんな時私がザイルで確保してあげればよいのだが、確保するのにも自信がない。どうしたらいいんだろうと思いながら、上からボートみていた。佐藤君は行き詰まり、2mぐらいおちてしまった。幸いががなくすんだが、佐藤君には迷惑をかけてしまった。相手を確保するという技術をもっとしっかり覚えようと反省した。

集合場所の本間の頭には私たちパーティが最後に到着。またまた佐藤君の足をひっぱり、途中あまりのおそさに心配して高木さんがむかえに来てくれ、生井さんも待っていてくれた。本間の頭で本団さんに山菜の天ぷら、おひたしをごちそうになった。おいしかった。帰りは川上君のいたいたしい姿が印象的だった。川上君、東京にいつてもがんばってね！！（筆者　記）



シャワークライム
早戸川太札の沢
Bパーティ L 生井一男、高木均

丹沢観光センター宿泊地で鳥屋鐘沢パーティ、本間沢パーティと別れ、上流の沢を目指す3パーティ。共に林道を20分ほど歩くと、終点に至る。ここから円山木沢パーティと別れ、残りの2パーティは更に上流を目指す。沢に沿って道があるはずであるが、見落としたのかわからなかった。たいした距離でもないので沢を遡ってい

く。佐藤君、笹沢さん、高木の3人はどんどん水の中を進むが、ハイキングのつもりで来たという生井さんは水に入らぬよう苦労をしていた。しかし、とうとう最後にザブザブと徒渉を余儀なくさせられていた。入谷予定の2つの沢の入り口は10mも離れていない。ひと休みしていると親子連れがのんびりと道をたどってやってきた。道を歩くつもりでいたのが、ビショ濡れとなった生井さんのぼやくことしきりであった。

8時10分、緊張気味の瀬戸の沢パーティと別れ、ガラガラとただ岩の重なる太札の沢を黙々と進むと、前方に滝が現れる。15mほどありそうで結構面白そうだ。生井さんトップで左側から取り付く。フェイス状を3mほど登り、凹角に入り滝の左上にでる（3級程度）。さらに草付きを登りピッチを区切る。その上は小さな廊下状であるが、一気に巻いてしまう。しかしこれは後悔やむことになった。というのは、ここが最初で最後の岩場であったのだ。

そのあとはただガラガラと石の上を歩くのみである。気晴らしに、地図に載っているがすべて埋まってしまった滝を想像しながら歩く。途中で、他のパーティと交信を試みる。円山木沢の川上君が落ちたとかいっているが、両隣の沢のパーティもなんとか元気に登っているようである。

最後に急勾配の登りをあえぎあえぎ終えると、沢は大木におおわれた下草もない尾根に消えていた。5分も尾根上を進むと、いきなりといった感じで縦走路に飛び出した。10時20分。このいさぎよさは好きである。まったく源頭で何時間もヤブコギをさせらるのは、終楽章の延々と続く交響楽を聞かされるようでたまらない。

路に腰を下ろして、ラジオから流れる音楽を聞きながら世間話をして、若い佐藤、笹沢パーティの到着を待つ。霧があたりをつつみ、静かな時間が過ぎる。11時の交信では、尾根に上がったといっていたのですぐに合流できるかと思ったが、さっぱりやってこない。心配して迎えに行き、瀬戸の沢の頭で11時30分ようやく合流した。そのあと縦走路をたどり、途中で川上、中居パーティと合流しながら、集合地である本間の頭へと向かった。丹沢は、山が浅いのでプレッシャーが全くなく、好きである。

（高木 記）

円山木沢で有終の美を飾ろうとして

Cパーティ L 川上浩史、中居康展

今回の山行が、私のACC-J茨城においての最後のものとなりました。6月からは同系列山岳会、ACC-Jに移籍となります。こんなにも盛大な送別会を設けて下さいまして、会員の皆様どうも有り難うございました。

さて、例によって我々10人は夜9時に土浦の協同病院駐車場に集結した。社長のハコだけでは乗り切れないで、高田さんの車も出動、2台つるんでの出発である。例によって高速道路はレース場と化し、ずいぶん早く相模湖まで来たが私のナビのミスで少々へんな道に入り迷ってしまった。まあなんとか林道の駐車場に着き、テントを張って酒を浴び寝た。

17日の朝、天気は曇りだったが明るく、雨の心配はなさそうだ。朝食後に社長と親方が車で林道を引き返して行くと、我々は魚止め橋へと林道をつめる。林道が終わり、道が沢に出合う所で登攀具をつける。生井さん達は更に上流へ向かい、私と中居君で円山木沢へ入渓して行った。

初め小さな滝が連続し、簡単なので快適に越すと、いきなり我々の前に待ってましたとばかりに大きな滝が姿を現した。これが最大核心部の、25m大滝である。社長の指令ではこれを巻くようにとの事だったが、最後の山行でもあるので良いトコ見せてやろうじゃねえかと奮起し、ザイルを出した。登ってみると下の方は簡単に上れるが最上部に達するとホールドがなく、つるつるてんになっていた。ピンも打ってあるが、一部はグラグラで頼りないものもある。シューリングが掛かったピンもあり、それをもちいてあぶみの用な使いかたをする。すると左側に一步踏み込めば右へ抜けて悪場を通過できそうになって入るではないか。右前方のピンにシューリングを掛け、いざ左足を踏み込んだ瞬間足が滑り体が左へ傾いた。次の瞬間頭が下を向いたらしく、滝壺が見えている。滑落しているのだ。6~7m程落ち、顎と左足を打ってザイルで止まった。中居君、止めてくれてありがとう。私は少し動揺しながらクライムダウンと懸垂下降で取り付きに戻った。

「あそこ難しいぞ」「今度は俺がやってみるよ」とトップを交替し、中居君が登る。彼も最大核心部で2回程軽く滑った様子だったが、スルスルとザイルが伸びやがて

「ビレイ解除！」と大声で伝令を飛ばす。「偉えぞ！」と応え登り出す。核心に近づくと、上から顔を覗かせている。「ここが難しいんだよな」などと言いながら登りクリヤした。やっと第一の滝を突破した。顎を手当してもらい、交信。生井さんの声が聞こえる。「ナニ？ 川上が墜落した？」なぜか本図さんとはつながらない。

さて、気を良くして登攀再開。第二の滝も見てみたが、左上するバンドが極端にバランスを要求されるので諦めて巻く。小さな尾根を木登りしながら行く。しかし登り過ぎて沢の音がなくなってしまい下り始める。途中沢が見えてきたので懸垂して本流に戻る。これらは簡単だがダイナミックな滝の連続で面白い。

しばらく行くと美しいナメ滝になっており越えて行くとゴーロの河原になっていた。休んで昼食と交信。この時、佐藤一笙沢パーティはすでに稜線に出たとのこと、

「速えな、よし俺達も負けてはいられない行くぞ。」後は簡単な登り。ついに水も涸れ砂の斜面である。これはウエディングシューズでは登りにくく、何回か滑り落ちて流された。まあなんとか稜にはい上がり、ヤブこぎをする。交信のはずが中居君の時計が止まっておりチャンスを逃す。

円山木の頭で握手をして登攀具を片付けていると、ぞくぞくとメンバーが集結してきた。本間の頭で全員揃い、社長がてんぶらとおひたしを用意してくれていた。

下山を始めると急な下りで滑りやすく右側には厳重な鉄条網が張り巡らされた警戒領域があり転べない。また足が痛かったのでゆっくり下ると先頭との差がますます拡がる。

観光センターに着くと、中居君は知らぬ間にヒルを5匹飼っていた。ピールを飲み、着替えて一路茨城への道に着いたのである。大変充実した山行だったのである。

最後になりましたが、3年半もの間いろいろとお世話になり有り難うございました。これからも山で、ナーゲル祭でお会いしたいと思っております。皆様の御健康とACC-J茨城の御発展を祈りつつ、筆を置かせて頂きます。

(川上 記)

駐車場発 (6:45) — 円山木沢入口 (7:05~7:25) — 第一滝取付 (7:40)

— 第一滝上 (8:45~9:10) — 昼食 (11:00~11:20) — 円山木の頭 (12:20~

12:35) — 本間の頭 (12:50~13:20) — 観光センター (14:30)

早戸川流域、本間沢での一日

Dパーティ L 原田真由美、村上晴美

いつものように協同病院駐車場を出発して、丹沢についたのが真夜中である。更にいつものようにテントで小宴会をおこない（今回は5パーティ、10人である）、アルコールの助けを借りて眠りにつく。あっという間に朝が訪れてしまった。AM6:00。いつもなら力いっぱい熟睡中の時間である。非常にかったるい。だが、徹夜明けでない早朝の空・風・気配はなかなかよいものだ。

今回は、原田さんと2人のパーティである。初めての女性パーティだとか何とかと、某氏におだてられ、励まされて、さて出発である。ザックを背負うと、今回もまた行かねばならぬのだなあという諦念の混ざった決意がよぎる。入渓はAM7:00。久しぶりの沢歩きだ。河原歩きでも、原田さんから遅れてしまう。日頃の運動不足と不規則な生活もたたっているのだろうが、原田さんはさすがだなあと思いつつ、後ろについていく。

滝に出会う。山登りをしているとよく思うことであるが、いつか飛行機事故で人跡未踏の山の中にとり残されたときに、生きのびる練習をしているんだと、妙なことを考えながら歩いているのである。特に沢で滝を対面した時はその気持ちが強い。つらつら思いつつ、いくつかの滝を直登したり、巻いたりして越える。なかなか快調である。

いくつ目の滝であったか、また目の前に滝があらわれた。この滝は私にはちょっと手強そうである。原田さんは直登。私は日和って巻くことにする。巻きながら原田さんの方をみると、もう少しで登り終わりそうである。しかし、この巻は失敗だったかもしれない。崖を崩れた小石や土が、ちょうど安息角を保っているため、私が登っていくと蟻地獄に落ちた蟻のように、足元から崩れていく。登っているのか滑っているのか、落ちたらけっこう痛いよなあとおもったりして、冷汗たらたらである。高く巻き過ぎているかもしれないと、ふとを考えたが、しかたない。とにかく沢まで戻らねばと、遮二無二に進む。30分くらいいたったような気がするが、やっと沢に戻った。原田さんが見えない。あんまり待たせ過ぎてしまったかなあと思って、ちょっと上流の方へ行ってみたが、全く姿が見えない。またもや真っ青である。うーん。どうしたらよいのでしょうか。しかし、原田さんのことだから、見捨てられてしまったという事

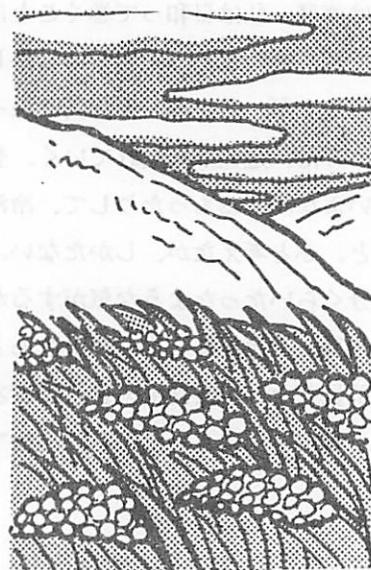
は絶対ないだろう。などなど考えてうろうろする。滝の上の方で休んでいるのだろうかと思って、下流に向かってみると、切れ落ちた辺りにもいない。まさか、いないだろうと思って、ふとのぞき込んでみると、いました。よかったです、よかったです、と思いつつ、カメラを構えて「原田さん直登成功！」の瞬間をとろうと、しばし待っていたのだが、またよ、たしか私が巻き始めた頃もある辺りまで登っていたよな。ザックの中から、シューリング、カラビナ、ヌンチャクなどを取り出して、原田さんの真上まで行く。最後の一歩のホールドが見あたらないとのこと。近くの木の根元にシューリングをくくりつけて、足りなかったので、ザックのひもと交換しておいたザイルも使用して、無事二人とも滝の上に立つ。原田さんは、しばらく水しぶきを浴び続けていたそうで、とても寒そうだ。

しばらく休憩したが、じっとしていると寒いので、出発することにする。どうやら核心部は終わったようだ。沢をどんどんつめていき、ガレとなった頃、何かの白骨を見つける。一体だけではなく何体もの、どうやら鹿の白骨である。大殺戮でも行われたのだろうか。不気味だ。

さて、やぶこぎを終えて、何とか尾根を見つけ、合流地点に向かう。本間の頭着は、AM 11:30 である。尾根は風があり、けっこう涼しいというより寒い。雨具を着て、本図さん特製？のミズナのおひたしをいただく。おいしい。そして、山菜の天ぷ羅。これがとてもおいしゅうございました。

しばらくすると、他のパーティの人々も続々と合流して、このおいしい御馳走をいただいたのだが、川上君頭割り事件やら蛭がいっぱいきてきたことやら、いろいろ他にも思い出したことはあるが、とりあえずこのあたりで締めとする。

(村上 記)



鳥屋鐘沢

Eパーティ L 高田暢年、本図一統

今日は、しばらくぶりの会山行である。川上君が家庭の事情でACCJ東京に移籍するためのお別れ山行でもある。今回のパーティ編成はいつもとちょっと違う。女性だけや若者ののみのパーティを作った。自分の登攀力やルートファインディングに自信を持つことができるよう、ぜひ完登してもらいたい。

さて、丹沢では初めての早戸川なので、昨夜テントを張る場所がわからず探したが、結局丹沢観光センターの駐車場に幕営し、川上君のお別れパーティを盛大におこなった。雨もあがつたので出発準備にとりかかる。キジを撃っていると足元で何やら動いている。丹沢にヒルがいるなんて聞いたことがないので、尺取り虫だろう。我々の入る沢は出合が遠いので車で行く。地図上ではけっこう楽しめるのではないかと思っていたが、面白くも何ともない。滝らしい滝もない。ただ歩いて行くだけである。他パーティは順調に登っているか少し気になる。無線も聞こえてはくるが、こちらの電波は届かないようだ。突然高田が山ヒルだと言いだした。見ると私の最も嫌いなヒルがすでに何匹も靴にくつついでいるではないか。早々にここを逃げ出す。

頂上でみんなに山菜の天ぷらを食べさせてやろうと、ミズナ、アザミ、イワタバコ、モミジガサなどを採りながら行く。



無線交信をする本図

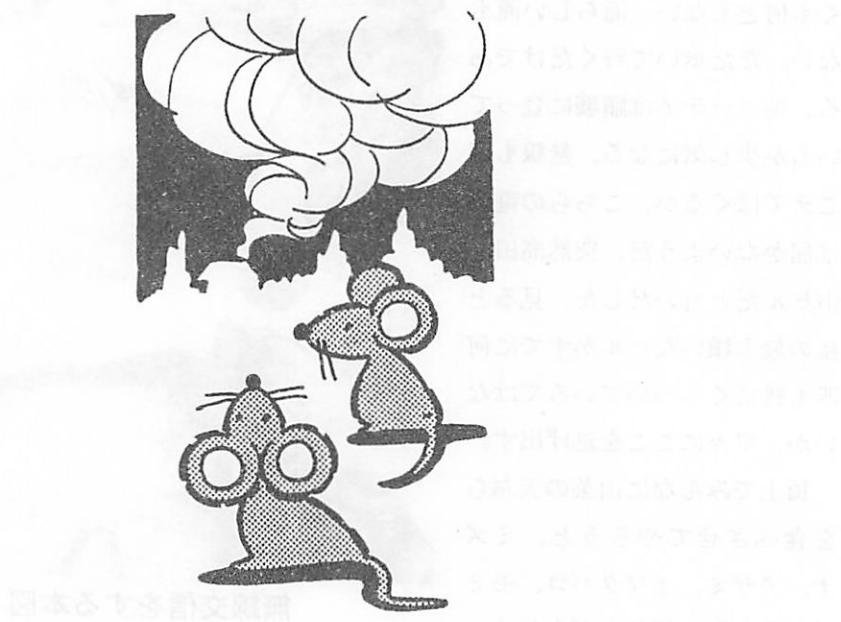
本間の頭には、まだだれも来ていなかった。

「私はだいぶ昔、ここに来たことがあるが全然記憶がない。それも無理からぬことだろう。だって28年前のことなのだ。東京に出て、初めて登ったのは丹沢主脈縦走、次はこの三峰縦走だった。あの頃は若かった。頭も黒々としていた。岩登りや沢登りに行きたいという期待と希望に胸を膨らませていたっけ。三人寄れば山岳会といわれた時代で、山岳会も全盛。そうそう東京農大死のシゴキ事件があったのもこの頃だ。」

無線が通じ、他のパーティはこちらに向かっているとの事。寒くて走りながら体をあたためる。そのうちぞくぞくと他のパーティが到着しはじめ、今日の沢登り談義に花が咲く。10人もいるとずいぶん賑やかである。記念撮影後、下山。丹沢観光センターへの道は一般道ではないが、よく踏まれており安全で迷う心配もない。靴を脱ぐと、スパツなどから何匹もヒルが出てきた人もいた。

川上君、もし茨城に就職したら、又わが会に戻ってきてくれることを望んでいます。

(本図 記)





本間の頭にて（撮影、本図）



生井 中居 村上

谷川岳一ノ倉沢南稜

92. 6. 7

パーティ L. 高田暢年、原田真由美、中居康展

前日6／6（土）に新人の庄司の岩トレを日立の御岩山で行い、一度アパートに戻り不足な装備を補充し、原田さんに電話をして下館集合を21時過ぎ頃と決め途中同じく御岩山の岩トレに参加してた中居を拾い下館へと向かう。なんとも憊ただしい出発である。

南稜は今回で3回目である。中居が一ノ倉沢に入るのが初めてである事と岩登りのシーズン初めてでもある事と岩登りのシーズン初めでもある為、南稜を選んだ。

1：00出合い駐車場着、大変車が多く車を停める場所を探すのに苦労する。おまけに虫も多くテントを張るのにもヘッドライトをつけてられない程だ。軽くビールで一杯やり仮眠を取る。

6／7 4：30起床 テントの外のざわめき声で目が覚める。外を覗いてみると天気はよく一ノ倉がはっきり見える。外のざわめき声はアマチュア写真家連中の声であった。今は写真ブームなのだろうか？前はこんなに人はいなかつたような気がするのだが。

早々に朝飯を済ませ5：20出発。この時期は雪渓がかなり下まであるのでアプローチが楽である。（とは言え南稜テラスまで行くのは結構疲れる）

特別速く出発した訳でもないのに駐車場の車の数の割りに登っている人が少ない気がする。殆どがカメラマンなのだろうか？

7：00南稜テラス着 我々は6、7番目位であった。以前よりは減ったとはいえ、やはり人気ルートだけの事はある。あとからも続々と人が南稜テラスへやって来る。

7：40登攀開始、中居がトップで行き原田さんがビレイをする。私は暇なので写真を撮ったりしながらのんびりと登った。最後のフェース（核心部）辺りで少し順番待ちをしたが、後は順調に登った。過去2回のこのルートを思い出すと最初はまだこの会に入ったばかりで、2～3回ゲレンデで練習しただけで連れてこられたのでまだ靴も登山靴で、ザイルに引っ張られながら死ぬ思いで登り、2回目はトップをやるようになつたばかりの頃で緊張して登つた覚えがある。

中居の登りは下から見てもとても初めて一ノ倉に入った人間とは思えないような、安定した登りで安心して見ていられるものであり、これから大いに期待ができるであろう。

10：30 終了点着 殆どの人は六ルンゼを懸垂下降で下っている。（本団さんに言わせると邪道）我々も六ルンゼを下降する。途中原田さんが8環を落とすというアクシデントもあったが、後続パーティに下降器を借り無事下る事が出来た。南稜テラス 12：30 着 これよりテールリッジを下り、駐車場 13：50 着。天気にも恵まれ、まずまずの登攀であった。

(高田 記)



終了点にて

憧れの中央カンテ

92. 6. 13

パーティ L 高田暢年、中居康展、原田真由美

♪ 晴～れた空、そ～よぐ風。

ヤッター、ラッキー、とうとう中央カンテを登ってしまいました。中央カンテは去年から行きたいと騒いでいたところだったのです。私と谷川岳登攀の出合はマチガ沢の東尾根でした。その時の魅力に取りつかれ、さっそく買い込んだのが山と渓谷社から出されている「谷川岳の岩場」というガイドブック。その本をながめながら、一の倉沢の南稜、中央稜、二ルンゼ、凹状岩壁、または幽ノ沢の岩場と着実に階段を登るように谷川岳の岩場を制していくのです。そのうち人工登攀を覚え、衝立のダイレクトカンテをきっかけに、コップ状岩壁に通いだしました。しかし天気に恵まれず、体調に恵まれず、登れない。また登れなかつたと荒れ狂っていた時に、ふと「谷川岳の岩場」をながめてみたら、”あれっ、中央カンテまだ登っていないや”と気がついたのです。さっそく「ネエー、誰か中央カンテに行こう」と声をかけても、”そこ先週

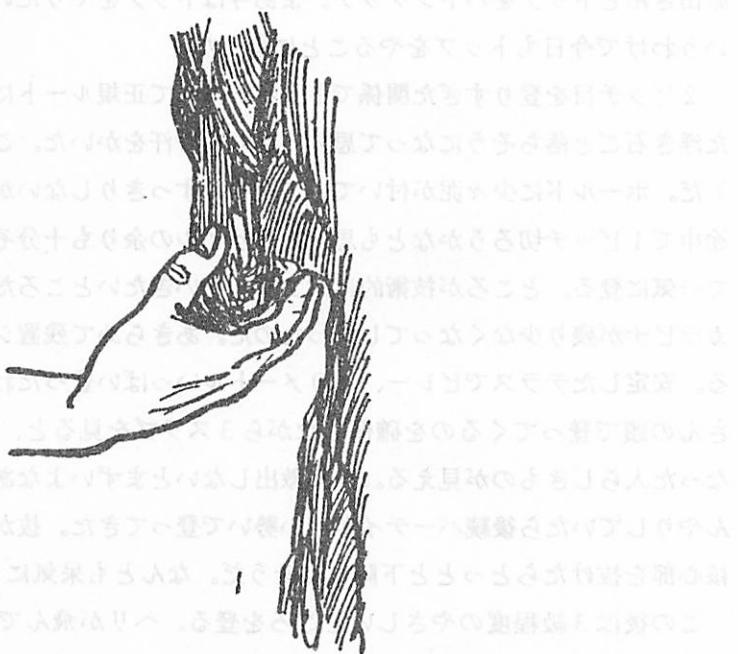


チムニーを登る、原田

登ってきたよ”。”俺、昔に登ったよ”という具合で完全にあきらめていたんです。ところが、♪ 晴れた空、♪ そよぐ風。歌の一つも歌いたくなるじゃありませんか。あきらめていた中央カンテに行けるんですから。

歌の通り天気は晴れ。中居君がトップでリードして行きます。私はセカンド。リードする実力もないのに、とりあえず登ってしまおうっていうところが私のずるいところです。先行パーティが誤って凹状岩壁に入り込んだすきをついて、中居君が正規ルートにザイルを延ばします。それにしてもヒヨコヒヨコとバランスよく登っていきます。たしか本番の岩場でトップをするのは2回目だったよなあ。すごい度胸。多少の嫉妬心を感じながらも安心して見てもらいます。最終ピッチの凹角が少々苦労していましたでしたが、難なくクリア。しかし、彼は「全部フリーでやりたかったのに、A0つかってしまった」としきりに残念がっています。オイオイ、そこはA0でもいいんだよ。トップなんだから安全に確実にいこうよ。セカンドの私はそんな冒険もせず（もちろんフリーで越す実力もないが）、心おきなく残置ハーケン、残置シューリングを利用して終了しました。

（原田 記）



一ノ倉沢 中央稜

92. 6. 14

パーティ L 高田暢年、原田真由美、中居康展

中央カンテを登り、たっぷりビールを飲んで早々に寝てしまった昨晩だが、外では3スラブで遭難があったとかで一晩中あかりが灯っていた。4時前のまだ暗いうちに本団さんたちがテントにやってくる。こんな暗いうちから出発しなくとも…と思うが結局こちらもラーメンを食って早々に出発することにする。テントの外でごそごそやっていると本団さんの袋が落ちていた。中身は望遠鏡、行動食（あずき缶）、巻紙等々。どうせ今から追いかけても間に合わないし、今日の行程からいっても落ち合うわけでもないということで置いていくことになった。

4時半出発。相変わらずテールリッジの取り付きは長いし悪いし、昨日の酒が抜けきらない体にはこたえる。中央稜の取り付きにはまだ誰もいなかった。南稜パーティも一番最初に取りついたようだ。先週の混み具合とはずいぶん違う。今日は原田さんがトップをやることでこちらはのんびりとしたものだ。ところが2ピッチ目で原田さんとトップをバトンタッチ。まあ今はトップをやりたい盛りだからいいか、というわけで今日もトップをやることになった。

2ピッチ目を登りすぎた関係でトラバースして正規ルートにもどる。途中抱き抱えた浮き石ごと落ちそうになって思いっきり冷や汗をかいた。この次が核心部、4級A0だ。ホールドに少々泥が付いていてあまりすっきりしないが快適に高度をかせぐ。途中で1ピッチ切ろうかなとも思ったがザイルの余りも十分そうだったので思い切って一気に登る。ところが技術的にはフリーでいきたいところだが余りのシュリング、カラビナが残り少なくなってしまったのだ。あきらめて残置シュリングをつかんで登る。安定したテラスでビレー、40メートルいっぱい登ったわけだ。原田さん、高田さんの順で登ってくるのを確保しながら3スラブを見ると、なにやら宙ぶらりんになつた人らしきものが見える。早く救出しないとまずいよなあ…などと見ていた。ぼんやりしていたら後続パーティが凄い勢いで登ってきた。抜かれるのかなと思ったら核心部を抜けたらとっとと下降するそうだ。なんとも呆気にとられてしまった。

この後は3級程度のやさしいところを登る。ヘリが飛んできて声が良く聞こえない。二回ばかり一ノ倉を旋回してヘリは帰ってしまった。全く遭難だけは起こさない

ようにしなければ…。無線によると南稜パーティは早くも登りきつてしまい、こちらと合流すること。これなら忘れ物を持ってくればよかつた。特に難しいところもなく順調に衝立ノ頭に到着。ここで南稜パーティと合流した。

衝立ノ頭からの懸垂下降は2パーティ分のザイルを使ったので6人いても早いもの。あつという間に略奪点に到着。衝立前沢を下る。前沢の雪渓で一休みしながら3スラブの救出状況を見る。本図さんや鯉河さんたちが、あの白いのは人だろうなんて言っているのだが自分にはちっとも見えない。この人たちがなんて目をしているのだ！本図さんは「ここで望遠鏡があるといいんだなー。」とか「氷あずき食いてえなー。」などと悔しそうだった。

衝立前沢は残雪もなくガンガン下れたのだが、ここで自分は折れた木の枝をつかんで転落。尻を思いっきりぶつけてこの後1週間仰向けに眠れない日々が続くはめになった。下で遭難について聞いた話では、死んではいないが重傷のことだった。

ともかく皆無事に下山できたところで温泉に行ってビールで乾杯！梅雨時にもかかわらず谷川で2日間ちゃんと登れたという快挙に満足しながら帰途についた。



中央稜終了点にて（中居、高田、原田）

初めての谷川岳、一の倉沢・南稜

92. 6. 14

パーティ L 本団一統、鯉河仁志、大月繁夫（笠間おちこち山の会）

今回のリーダーである本団さんには、約1年くらい前から『谷川に連れて行ってやるから、トレーニングをしっかりやっておけ』と言っていた。私自身、本チャン経験は北岳バットレス4尾根くらいしか無く、岩を登る者なら誰しも、谷川岳・一の倉沢には強い憧れを抱くものだと思う。たとえ私のような、サンデークライマー（万年ゲレンデクライマーの方が適当かな？）であっても、チャンスさえあればいつでも登りたいと思っているのは、誰しも同じはずである。

今回の具体的な日程、およびルート決定の知らせは、5月中旬頃入った。初めての谷川岳一の倉沢、そして初めてのルートに興奮しながらも、落石の心配や天候のことなど、色々な思いを浮かべながら出発の日を迎えた。

集合時間（といっても、当初計画では本団さんと私の2人だけ）に遅れないよう、10分程度早めに家を出て、本団さん宅へ向かった。昨日入山している先発パーティからの連絡では、どのルートもかなり混んでいる様子。また急きよ、鯉河さんが我々のパーティに加わることになり、とにかく早く現地に着いて、早朝一番に取り付こうという事になり、車を下館へ走らせた。

下館で鯉河さんと合流し、本団さんのワンボックス1台で谷川に向かった。本団さんの運転のすばやさは、かねがね噂に聞いていましたが。それでもタフですねえ、ノンストップ2時間半、一の倉沢出合に11時30分に到着した。

早速3人で、就寝前の小宴会に入った。ところが、缶ビールを凍らせておいて持ってきたのは良かったが、あまりに早く着きすぎたため、ビールが冬眠からさめていなかつたのである。結局ビール缶を引きちぎり、スプーンでシャーベットビールを食べることで落ちついた。

6月14日（日） 天気 くもりのち晴

朝3時ピッタリに起床する。軽い朝食をとり、混まないうちにきじうちを済ませ、出発準備にとりかかった。梅雨入り時期もあり、天候が心配であるが何となく良さそうである。予定通り、4時ジャストに一の倉沢出合を出発した。

出発してすぐに、先発パーティの高田さんたちのテントを表敬訪問し、本日のルートの打ち合わせをする。その結果、高田さん達のパーティは中央稜を登り、我々は南稜を、そして終了点、もしくは稜線で合流というストーリイができあがった。

朝もやの薄暗い中を、ヘッドランプ片手に沢を詰め、雪渓を登り、ちょうど衝立前沢の出合付近まで登ったとき、本図さんが『大月君、ところでザイルは持ってきたよなあ』と言った。まさかと思いザックの中を調べてみると、見事に忘れてきてしまった。アハハハハ・・・・。本図さんの怒りが爆発せぬうちにすかさず、『本図さん、俺取りに行ってきまーす。』『当然だろこのタコ！！』というような顔つき（本当は意外と優しい顔だった）で、車のキーを渡してくれた本図さんでした。そんなこんなで、取り付きの南稜テラスには5時30分頃の到着となった。途中アホな事をやっていた割には、他のパーティが相対的に遅かったため、結局は一番で取り付くことができた。

南稜テラスで身支度を整え、5時40分、登はん開始した。1ピッチ目、本図さんがトップ、2番手に大月、そして鯉河さんの順で登る。初めて谷川の岩場にさわったが、ゲレンデのお岩山等でさわっている岩と同じである。硬くて乾いていてフリクションが良く効く。フォローということもあり、また超ベテラン2人に挟まれて、



南稜最終ピッチのフェイスを登る

まったく不安無く登れた。2ピッチ目のチムニーから3ピッチ目のフェースを抜けて、あつという間に中間の草付き帯に入った。ここで、上部から懸垂で降りてくるパーティがあるため、少し休憩となった。私も結構余裕だったので、あたりをグルリと見回してみたが、とにかくすばらしい眺めである。衝立岩から中央稜、本谷を挟んで中央奥壁から国境稜線、滝沢スラブから上部のドーム、マッターホルン状岩峰まで、そして遙か下方には一の倉沢出合に群がる見物人の豆粒。とにかく今、一の倉沢のど真ん中にいることが良くわかった。

下降してくるパーティを待ちながら、ふと滝沢スラブの中間から上部を見るとなんと登はん中のパーティがいるではないか。まだ早朝である事から、むしろ登はん中というよりも、どうも動けなくなってビバークしているようだ。本図さんが望遠鏡を忘れてきてしまったらしく、しきりにさわいでいる。そのうちに、救援のヘリがやってきて現場に近づいたが、ピックアップは無理とわかつて逃げ出していった。どうやら3人パーティらしく、1人が負傷しているようである。結局、本谷から救助隊が登つて行き、後に我々が登はん終了して本谷に降りた頃、負傷者も含め3人全員が無事救助されたようである。何はともあれ、めでたしめでたしである。

しばらく休んでいたら、下から後続パーティがチラチラ見えだしたので、我々も気を取り直して出発した。ここから上部は、下部に比べて何となく浮き石が多く感じられた。すぐ下にいる鯉河さんや後続パーティに気を使い、ラクをしないよう慎重に登った。そうこうしているうちにいよいよ高度も上がり、馬の背リッジを登る頃には、本谷や6ルンゼが深く切れ込み、圧倒的なスケールに気分も上々、ほどなくして最終ピッチの垂壁の下部に出た。終始、本図さんがトップ、2番手大月、ラスト鯉河さんの順で来たように、ここも本図さんトップで登り始めた。続いて私が取り付いたが、ここまでとは違つてかなり傾斜がきついようだ。

でも、不安感は全く無かった。2番手であるという条件と、意外とホールド、スタンスがしっかりしていて、確実なムーブが出来るからだ。午前7時5分、ついに念願の南稜終了点、垂壁の上に立った。途中曇りだして、ほんの少しパラついた雨もすっかり上がり、にわかに夏の日差しがまぶしくなってきた。

本図さんが、中央稜を登っている高田さんと無線連絡をとっている。我々がかなり早かったので、ここから一旦鳥帽子尾根に出て、衝立の頭で合流しようという事になった。草やぶの中を、イノシシの如く黙々と登り、懸垂岩のコルに出た。『すごいところだなあ』しばし見とれながら、ゼリーを口にいれた。そうこうしているうち本

図さんが、わたしのアブミを取り上げ、懸垂岩の垂壁を登りだした。わずか4～5mのルートであるが、せっかく持ってきたアブミが使えるという事で、急にうれしくなって後に続いた。いつものことながら、人工からフリーに移るところは緊張する。最後のワンムーブでザイルにぶらさがるような、格好悪い事は控えたかったので、全身の力を指先に集め、懸垂岩の頭に登り着いた。

大休止後、本図さんが懸垂ルートを探している。リッジ上は浮き石だらけで、ちょっとしたショックで即ラクとなるため、登はんパーティのいる鳥帽子奥壁側を避け、コップスラブ側に巻き5ピッチの懸垂で衝立の頭に出た。ちょうどこの頃、中央稜パーティも最終ピッチ近くにおり、我々はそれを眺めながら、のんびりとメシを喰いだした。最終ピッチ、中居さんリードで登はん終了し、我々と合流した。ここでくつろいだ後、いよいよ北稜を懸垂で下る事になった。

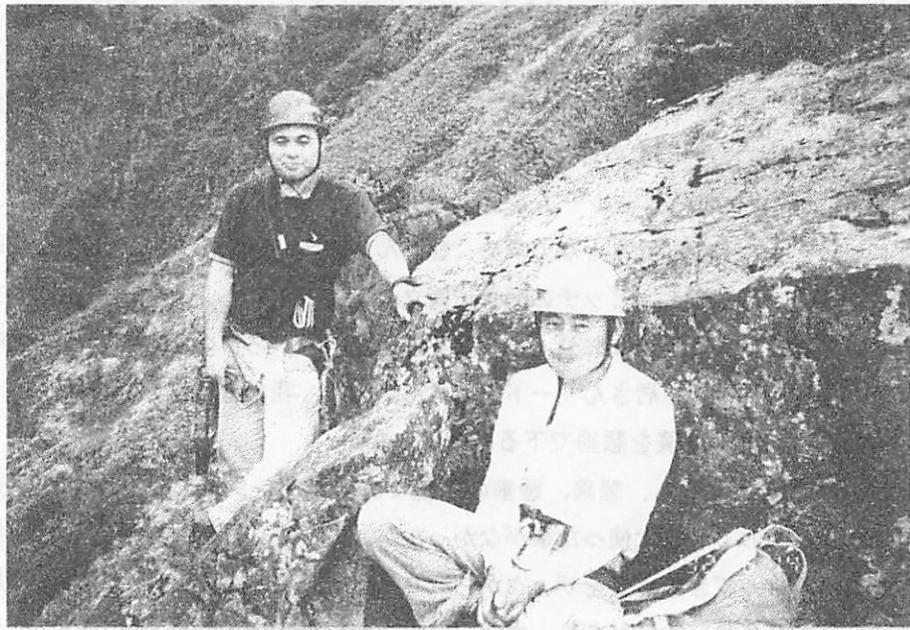
ここからはただひたすら、懸垂、懸垂の連続である。ゲレンデでは懸垂距離が短く、回数も少ないので手袋は使った事がなかつたが、こう続くと、さすがに熱くて我慢ができない。持ってきた手袋をザックから取り出し、身につけた。途中、空中に放り出される懸垂が2ピッチほどあり、また、コップ状岩壁や広大なコップスラブに見とれての懸垂は、まさに登った者にだけ与えられる特権でもある。

何ピッチ懸垂したか忘れた頃、コップスラブの中間地点に降り着いた。ここから衝立前沢を下り、正午近い頃、本谷雪渓上に無事到着した。

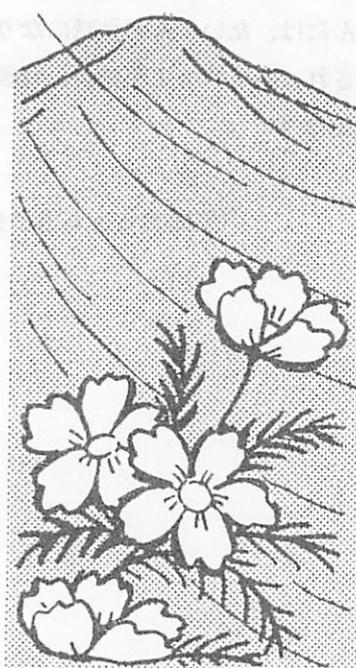
最後になりましたが、今回このようなすばらしい機会を与えてくださった、ACC-J茨城の本図さん、鯉河さんには、たいへんお世話になり、ありがとうございました。これからもお元気で活躍され、ACC-J茨城が、今後益々ご発展されることをお祈りし、お礼の言葉といたします。

(笠間おちこち山の会 大月 繁夫 記)

アートな仕事。お手本や壁の写真類、これは何者か天ての「あくび」はふらふら



懸垂岩にて、大月、鯉河



【山 大月 鯉河】

※ 編集後記

5号から誌名がR & Vに変わった。岩と渓谷という名前は、日本の有名山岳雑誌にあまりにもよく似ているというクラブ内外からの批判に編集部が屈服したのである。RはR o c k、つまり岩、VはV a l l e y、つまり渓谷のことである。これで又、岩と渓谷を英文にして、その頭文字をとつただけじゃないかという批判が出るかもしれない。しかし編集部は悩みに悩んだあげくこの名前にしたのだ。もう変更するつもりはない。誰が何と言ってもこれからはR & Vでいくのだ。だれか文句あるやつはいつか？ いたらかかるつこい。いつでも相手になってやる。そんな奴、丹波川のおいらん淵にぶっこんでやる。

(音菜台州記)

季報「R&V」第5号 発行1992年 春

発行者：鯉河仁志

発行所：ACC-J茨城 〒315-01 茨城県新治郡八郷町柿岡1997

本図一統方

編集者：土度助兵衛 音菜台州記
